

髪を持ちて家に帰り、子の為に法事を備へ、其の髪を篋に入れ、仏の像の前に置き、謹みて誦誦を請ふ。母の慈深きが故に、惡逆の子に哀愍する心を垂れ、其の為に善を修ふ。誠に知る、不孝の罪の報はなほ近し、惡逆の罪彼の報無きにあらず、と。

力女掬力を試る縁 第四

聖武天皇の御世に、三野国片泉郡小川市に一の力女有り。為人大なり。名けて三野狐と爲ふ。是れ昔三野の狐を母として生れし人の四継の孫なり。力強きこと百人の力に當る。小川市の内に住み、己が力を持ち、往還の商人を凌解けて、其の物を取りて業とす。時に尾張国愛智郡片輪里に一の力女有り。為人少し。是れ昔元興寺に有りし道場法師の孫なり。其れ三野狐の人の物を凌解けて取ると聞きて、試むと念ひて、蛤五十斛を埒りて船に載せ、彼の市に泊つ。また備けて熊鷹の縄二十段を副納む。時に狐來り、彼の蛤をみな取りて売らしむ。然らうして問ひて言はく「何より來る女ぞ」といふ。蛤の主答へず。また問へども答へず。重ねて四遍問ふ。すなはち答へて言はく「來る方を知らず」といふ。

狐礼無しと念ひ、打たむとして起ち依る。すなはち二手をもちて待ち捉り、葛縄を以ちて一遍打つ。縄に肉著く。また一の縄を取りて一遍打つ。縄に肉著く。十段の縄をもちて、打つに随ひてみな肉著く。狐白して言さく「服はむ。犯せり。惶し」とまうす。是に狐の力に益ることを知る。蛤の主の女言はく「今より已後、此の市に在むこと得され。もし強ひて住まば終に打ち殺さむ」といふ。狐打ち取められて、其の市に住まず。人の物を奪はず。彼の市人惣みな安穩を悦ぶ。夫れ力人の文、世を継ぎて絶えず。誠に知る、先の世に大なる力の因を殖え今に此の力を得たり、と。

漢神の祟に依り牛を殺して祭りまた生を放つ善を修むて現に善と惡との報を得る縁 第五

攝津国東生郡無田村に、一の富める家長公有り。姓名詳ならず。聖武太上天皇の世に、彼の家長漢神の祟に依りて禱りて祀る。七年を限りて年ごとに殺し祀るに一の牛を以ちてす。合せて七頭を殺し、七年に祭り畢る。忽に重き病を得たり。また七年の間を遑て医藥方をもちて療せどもなほ愈えず。

みゆく人を引きあける描写を含み、イメーシの結びつきがみられる。六、不孝を描く上巻二十三縁に、「天知地知」として、やはり「天」が述べられていた。

一僧を請じて仏事をおこなつたのであらう。

二 中巻三十三縁に、死者の頭を轉宮に納め仏前に置いた、と述べられている。遺体あるいは遺骨の一部分、あるいは遺骨を宮に納めて仏前に安置することが追善の儀式の一部分としておこなわれたか。

三 追善のために、僧に誦經をねがって布施する。

第四縁 上巻三縁、三縁、を承ける記述を含んでいる。今昔物語集・二十三・十七に書承。

四 「掬力」は仏典にみえる語。たとえば大般涅槃經・如來性品。腕力を競う意に限定されない。

五 岐阜市。

六 未詳。下文より推せば皇良川の沿岸に所在。

七 未詳。へ、上巻三縁。この割注によつて本

説話が上巻三縁に結びつけられる。それはまた

上巻三縁が道場法師にかかわる説話に結びつけ

られることでもある。八 玄孫。曾孫の孫の子。

九 二上巻三縁には「是人強力多有とあつた。

十 先祖と同じ能力を有することになる。

十一 威圧して打ち負かす。「凌シヘタク」(名義抄)。

十二 国史記書紀本訓撰「解・僧師太社」。

十三 名古里市中区。上巻三縁、中巻二十七縁、

と同じ地。地名異記が異なる。依拠資料の用字

の反映か。一三 大きい者と小さい者とが争い、

小さい者が勝利をなさぬ、というのは口承の

世界に多くみられる説話の型。一四 上巻三縁

この割注によつて本説話が上巻三縁に結びつけ

られる。一五 食用であらう。書紀・景行天皇五

十三年來に白蛤を膳にしているのが蛤を食用に

したのが國での初出例。一六 「斛」は量の単位。

一七 斛は十斗、一斗は十升。上巻三十一縁にみえ

る「石」と同一の量を示す単位である。本書で

「斛」「石」の二つとありがみられるのが度量衡の大

小の割注にかかわるか、あるいは別の理由による

ものかは、各一例という例の少なさから判断と

しない。一八 皇良川を溯航したのであらう。

一九 和名抄に馬鹿草、久米草、良とみえる植物

は現代でも同じくクマツツラと呼ばれている。

武田祐吉は本説話の「熊鷹」はそれとは別で「大

きな鷹性植物である」とし、諸注は武田説に追

随するが、再考の必要がある。道場法師の孫女

の体格を、武田説はじめ諸注は大きく考えすぎ

ているきらいがある。室町物語の小男の草子

の主人公のように、一尺程度の身長と考えるべき

ではないであらうか。その程度の体格の女の持つ

腰としてクマツツラは不適当とはいえない。上

巻三縁にみえる道場法師も伝説の巨人タイタラ

ポッチとイメーシを重ね合せて理解する説はあ

やまりであらう。道場法師もおそらくは小さい

体格の少年であらう。二〇 しゃやかな弾性のあ

る。二一 播磨國風土記・六采郡に(御方)の

里の地名起源説話に「黒鷲三条(八)」を述べる。

黒鷲(名義抄ではツノヲ)を数える助数詞が

「かたであることがわかる。熊鷹翼の腰も「か

たで数えてよいであらう。二二 師手。万葉集・

三・三三二(二)。「三 狐の体の肉が削ぎ落さ

れ、腰にその肉が着く。三 原文「服也」(犯也)。

四 中巻二十七縁にも降服する船人のこと

ばとして「犯也」(服也)とみえる。二五 打たれて

鎮められる。「一般は戦いをやる意。三 仏典

語。たとえば妙法蓮華經にみえる。三六 系統。

三 先世殖大力因この具体相は示されていない

ト者を喚集めて祓へ祈禱れどもまたいよいよますます病む。茲に思はく「我が重き病を得たるは、殺生の業に由るが故なり」とおもひて、病に臥したる年より已來月ごとに闕けず、六節に齋戒を受けて生を放つ業を修ふ。他の舎生の類を殺すを見るときは、論はずして贖ふ。また八方に遣りて、訪ひて生物を買はしめて放たしむ。七年の頃に迄りて、命終る時に臨みて妻子に語りて曰はく「我れ死なむ後に、十九日置きて焼くことなかれ」といふ。妻子置きて、なほ期れる日を待つ。ただ九日を歴て還歸りて語りていはく「七人の非人有り。牛頭人身なり。我が髪に繩を繫けて捉へて衛み往く。前の路を見れば、樓閣の宮有り。問ひていはく「是れ何の宮ぞ」といへば、非人恵しき眼をもちて睜みて逼めて言はく「急に往け」といふ。宮の門に入りて白さく「召せり」とまうす。吾れ自づから閻羅王なることを知る。王問ひて言はく「斯れは是れ汝を殺せし讎か」とのたまふ。答へて曰さく「當に是れなり」とまうす。すなはち膾肌と少刀とを持ち出でて白さく「急に判語りて、我が賊に殺を加へよ。膾して噉はむ」とまうす。時に千万余人勃然に出で来り、縛れる繩を解きて曰さく「此の人の咎にあらず。崇れる鬼神を祀らむが為に殺害すなり」とまうす。爰に余れを中に居きて、七の非人と千万余人と日ごとに訴へ諍ふこと水と

火との如し。閻羅王判斷りて、是非を定めたまはず。非人なほ強ひて白して言さく「明に知る、是の人主と作りて我が四足を截り、廟を祀りて乞祈り、噉して膾して有に食ひしことを。今切穴の如くにしてなほ屠り噉はむと欲ふ」とまうす。千万余人また王に白して曰さく「我れ等委曲く此の人の咎にあらずることを知り、鬼神の咎なることを識る」とまうす。王自づから思惟ひたまはく「理は多くの證に就かむ」とおもひたまひて、八日を経じり、其の夕に詔を告はく「明日に参向でよ」とのたまふ。詔を奉りて罷つ。九日に集會る。閻羅王すなはち告之言はく「大分理判は多数くの證に由る。故に多数に就かむ」とのたまふ。判許已に訖る。七の牛聞きて、舌を嘗め唾を飲み、膾に切ることを効にし、穴を噉ふことを効にし、慷慨みて刀を擗けて建ひておのおの言はく「怨を報いざらむや。我れかつて忘れず。なほ後に報いむ」といふ。千万余人、我れを衛繞むこと左右前後にし、王の宮より出づ。羣に乗せて荷ひ、幡を擎げて導き、讃嘆めて送る。長跪き礼拝む。彼の衆人みな一じき色容を作す。爰に吾れ問ひて曰はく「仁者は誰人ぞ」といふ。答へていはく「我れ等は是れ汝の買ひて放ちし生なり。彼の恩を忘れず。故に今報ゆるののみ」といふ。閻羅の闕より還歸りて、ますます誓願を發す。此れより已後、効りて神を祀らず、

い。上卷三縁、中卷四縁、二十七縁では前世の因縁が言及される。道場法師の一族は仏教説話の枠内で活躍している、といえる。三野狐の一族はそうではない。

第五縁 善業と悪業についての現報説話。今昔物語集二十ノ十五に書斎。

六 伊勢、尾張、近江、美濃、若狹、越前、紀伊等の国の百姓が牛を殺して漢神を祭ることが、延暦十年(五二九)月に禁じられている(統紀、類聚三代格・十九)。本説話にみえる「漢神」と同一の神であろう。下文には「鬼神」とみえる。元元災厄がおきたはあい、それがいかなる神の祟りによるものか、が、善神者(善神)、ト君(ト君)夢、などによって示される。いかなる神の祟りなのかを知つた者は、その神にふさわしい方法をもちて神の心をなくさめて、災厄からのがれることを祈る。漢神のばあいは牛を殺して祭るのである。神に牛をささげたあとにその牛を人々が食べたことが、下文により推測される。三 大阪市。推問村は所在未詳。三 病氣治療のために、まず医薬方、次に卜者による祈禱、最後に仏教的善行、がところみられる。まず医薬方、という順序に注目すべきであろう。

一 攻証によれば六斎日。原文「毎日」とあるのだから六斎日なのであろうが、治病にかかわつて説かれる「六齋」が金光明最勝王經・除病品にみえる。一年は二か月ずつの六時に分割され、花時、藥時、雨時、秋時、寒時、氷雪、とされるが、この「六齋」にふさわしい食生活をおくれば病いは生じない、とされる。本説話の「六齋」との関係は未詳。六斎日は、毎月の八、十四、十五、二十三、二十九、三十日。二 生命ある

もの。三 臨・命終時(金光明最勝王經・長者子流水品)。四 この数字が何を意味するのかわからない。五 弟子死復生經に、「七日間は齋戒する」と遺言し、死して蘇つた説話がみえる。六 この数字が何を意味するのかわからない。七 八部衆、鬼神、などの類。八 地獄の獄卒。九 牛頭人手、面餓牛頭(五華章句経)。殺生の罪とかかわつて説話中に登場することが多い。たといは「冥報記・下・周武帝。本説話では牛頭人身の非人は獄卒であるとともに、主人公に殺されて食われた生でもである。牛を苦しめ牛を食つたがゆえに牛頭の獄卒に苛まれるのだ」とする論理は、日本で撰ばれた地蔵菩薩發心因縁十王經にみえる。九 冥界の王。閻羅は二静息(遮)又などの意の梵語の音写とされる(翻訳名義集・二)が、「羅は王」の意の梵語の音写の略とされることが多い。閻魔王、俗魔王、という呼称が、後代には多く用いられた。本説話の互目知之という記述は、その背景に閻羅王説話の流布をうかがわせる。二 七人の非人は。二 膾は、魚目や生牛の細く切つた肉。さきまざまな調味料で味つけし、生で食べる。膾肌は、そこで膾をつくるための机。現代のまな板。和名抄・調度部・厨膳具の「俎」の項に開元式を引用して「食刀切机各一」とみえる(食刀が本説話の「少刀」に、「切机」が「膾肌」に、あたるのである)。三 「ことわざ」の表記を同註「判断」「理」「理判」「判許」と変換させている。四 一人数の多さはきわめて異様である。五 いきどおりなく。国会図書館本訓訳「健健」オタシエ。六 荒々しくふるまう。経営する意に用いられることが多い。「建は健」の音文か。七 冥界より帰還する行列は、現世における葬列を模し

三宝を信信ひ、己が家に幢を立てて寺と成し仏を安き法を修ひ生を放つ。此れより已後、号けて那天堂と曰ふ。終に病むこと無く、春秋九十歳に死ぬ。鼻奈耶經に説きたまふが如し「迦留陀夷昔天祀主と作りて一の羊を殺ししに由りて、今に羅漢と作るといへども後に怨の報を得て婆羅門の妻に殺さる」と。最勝王經に説きたまふが如し「流水長者、十千の魚を放ち、魚天上に生れ、四十千の珠を以ちて、現に流水に報ゆ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

至誠心をもちて法華經を写し奉りて験有りて異しき事を示す縁 第六

聖武天皇の御代に、山背国相楽郡に、願を發せる人有り。姓名詳ならず。四恩を報いむが爲に法華經を写し奉り、大乘を納れむが爲に使を四方に遣りて白檀紫檀を求めしめ、すなはち諸樂京に得、錢百貫を以ちて買ひ、工巧人を喚び、規りて函を造らしめて經を納れ奉る。經は長く函は短し。經を納るること得ず。檀越大に悔い、また訪ふに由無し。故に誓願を發し、經に依りて法を作け衆の僧を屈請へて、三七日を限りて悔過し哭きて曰さく「また木を得しめ

よ」とまうす。二七日を歴て、經を請ひて試に納る。函目づから少延び、垂しめて納ること得ず。檀越ますます精進し悔過す。三七日を歴て、納るるにすなはち納ること得。是に奇異び疑ひ思はく「もし經の短むか、もし函の延ぶるか」とおもひ、すなはち本の經を請ひて新しき經と均べ量るに、なほ倅しくして失はず。誠に知る、大乘不思議の力を示して、願主の至りて深信心を試たることを。更に疑ふべからず。

智しき者變化の聖人を誹妬みて現に閻羅の關に至り地獄の苦を受くる縁 第七

稱智光は、河内国の人、其の安宿郡の鋤田寺の沙門なり。俗姓は鋤田連、後に姓を上村主と改むるなり母の氏は飛鳥部連なり。天年聰明し。智惠第一にして、王蓋蘭瓮大般若心般若の等き經の疏を製り、諸の学生の爲に仏の教を続伝ふ。時に沙弥行基といふひとと有す。俗姓は越史なり。越後国頸城郡の人なり。母は和泉国大鳥郡の人、蜂田樂師の子なり。俗を捨て欲を離れ、法を弘め迷を化へたまふ。器宇聰敏く、自然づから生れながら知りたまふ。内に苦

ておこなわれる。二 歌歌したのであらう。二 長跪は仏典語。二 漢神を祭つてかえつて吉難に遭つたので、神を悔懺する心がおきたのである。二 劫は、悔犯 悔辱、の意(敦煌文獻語言詞典)。二 種(二)の語が三三と対立するものとして用いられている。

一 未詳。無四村の「無」と関係があらう。

二 鼻奈耶・九の取意。衆經要集金藏論・殺書縁、諸經要集・十惡部・殺生縁にも引用。

三 金光明最勝王經・長者子流水品の取意。

第六縁 三宝縁・法十に引用。三宝縁より本朝法華縁記下・一〇五に書承。今昔物語集、十二ノ二十六に書承。

四 至誠心(觀無量壽經)。五 京都府用樂郡(一)郡、綴(二)郡の一部。六 上卷三十五縁。七 法華縁の異名として用いられている。八 和名抄は、紫檀を色によつて分け、赤いものを牛頭紫檀、黒いものを紫檀、白いものを白檀、としている。九 ヤクタンはヤクタン科、シタンはマメ科。九 錢一貫は一十文。たとへば、この当時の布二端(四丈三尺、幅二尺四寸)の価格二百文(石田茂作)。二〇 となへば、伝聖武天皇宸筆賢愚經(大聖武)は料紙が縫二七、八、紙金字金光明最勝王經(國分寺經)は料紙が縫二六、四、これらが裁減されて軸が付けられるとさらに長くなる。二一 細字の一巻本の法華縁が下巻一縁にみえるが、本説話の法華縁は特に何も記されていないことより推せば、七巻本あるいは八巻本の妙法蓮華縁であろう。下巻六縁は八巻本、中巻三縁は七巻本、と推測される。函の長さのみが問題とされるのは、おそらく一函に一巻を納めたことによる。下巻六

縁の小櫃には八巻が一括して納められている。法華縁を函に納めるイメージは、下巻六縁の法華縁を小櫃に納めるイメージに結びついている。二 施主。函を造らせた人。三 用談したのが解決の方法が無い。三宝縁・法十は「またこと木をもとむるに、とぶらひえず」とし、(四)を新しく白檀紫檀を求めると意に解している。二 法華經に附録し、法事をおこなふ。二 少しで納めることができるのだが、納めることができない。二 元原文(堀)「堀(マスマス)」「堀(マスマス)」「堀(マスマス)」(古訓点にみえる)。二 はびみつとめること。六 波羅蜜のひとつ。二 縁が解けたのか、函が延びたのか。

第七縁 三宝縁・法二、扶桑略記・天平十七年(盛)二月二十一日条に引用。日本往生極楽記・二に書承。日本往生極楽記により本朝法華縁記・上二二・今昔物語集・十二ノ二に書承。二 九「變化」は仏菩薩が姿をかえて現れること。二 如、是種種變化現、身二(妙法蓮華經・妙喜菩薩品)。二 行基大德有、文殊師利菩薩反化也(上卷五縁)。二 元風寺の僧。彼の善觀心經疏義、序に然自志字至于天平勝至四年、合三十四年とあり、天平勝至四年(盛)に四十五歳であつたことがわかる。行基より約四十歳年少。二 大徳府相原市、羽民野市あたり。二 三所在未詳。二 次田連とも表記する。二 本書で「姓」の語がきこえずものは「姓(二)」「氏(二)」(二)と姓の三種がある。「氏」の語は氏と姓をさし示すはあひがある。氏が鋤田・姓が連・氏が上・姓が村主、氏が飛鳥部・姓が造。二 舍利弗(舍利子)に關していわれることが多い。「離・舍利子、智惠第一、一聞千解二般若心經述義)。二 天玉・觀經述義、一卷(東伝燈目録)。散件。

惡逆子愛妻將殺母謀現報被惡死緣第三

吉志火麻呂者、武藏國多麻郡鴨里人也。火麻呂之母者、早部真君也。聖武天皇御世、火麻呂、大伴名姓不分明、筑紫前守所点、心經三年、母隨子往、而相飢養、其婦者、留國守家、時火麻呂、雖已妻去、不昇妻愛、而究逆謀、思殺我母、遭其喪服、免役而還、与妻俱居、母之自性、行善為心、子語母言、東方山中、七日奉說法花經、有大会、率母聞之、母所欺、念將聞經免心、洗湯淨身、俱至山中、子以牛目、眦母而言、汝地長跪、母瞻子面、而答之曰、何故然言、若汝託鬼耶、子拔橫刀、將殺母頸、母即子前長跪而言、殖木之志、為得彼莫並隱其影、養子之志、為得子力、并披子養、如侍樹漏雨、何吾子違思、今在異心耶、子遂不聽、時母佐僚、著身脫衣、置於三处、子前長跪、遺言而言、為我詠裏、以一衣者、我兄男汝得之也、一衣者、贈我中男、脫也、一衣者、贈我弟男、脫也、逆子步前、將殺母頸之頃、裂地而陷、母即起前、抱陷子髮、仰天哭願、吾子者、託物為事、非實現心、願免罪脫、猶取髮留子、々終陷也、慈母持髮歸家、為子備法事、其髮入宮、置仏像前、謹請諷誦矣、母慈深故、於惡逆子、垂哀愍心、為其修善、誠知、不孝罪報甚近、惡逆之罪、非無彼報矣、

- 1 早一早
- 2 留一留
- 3 飢一節
- 4 子(米國)一ナシ
- 5 而(米國)一ナシ
- 6 母頸母(米)一母々
- 7 頸之頃(米)一頃之
- 8 宮一若
- 9 深(米國)一深深
- 10 無(米國)一無無

力女拘力試緣第四

聖武天皇御世、三野國片晨郡小川市、有一力女、為人大也、名為三野狐、是三野國狐為母生之四姊妹也、力強當百人力、住小川市内、恃己力、凌弊於往還商人、而取其物、為業、時尾張國愛智郡片輪里、有一力女、為人少也、是昔有元興寺、遺囑法師之孫也、其聞三野狐凌弊於人物而取、念試之、蛤捕五十斛、載船、泊彼市也、亦儲備副、納熊葛練韃廿段、時狐來、彼蛤皆取令壳、然問之言、自何來女、蛤主不答、亦問不答、重四遍問、乃答之言、來方不知、狐念無礼、打起依、即二手待捉、葛練以一遍打之、韃著肉、亦取一韃、一遍打之、韃著肉、十段韃、隨打皆著肉、狐白之言、服也、犯也、惶也、於是知益於狐之力也、蛤主女言、自今已後、在此市不得、若強住者、終打殺也、狐所打敗、不往其市、不奪人物、彼市人摠皆悅安穩、夫力人文、繼世不絕、誠知、先世殖大力因、今得此力矣、

- 1 小(米國)一少
- 2 一力(米國)一力
- 3 小(米國)一少
- 4 郡(米)一群
- 5 一力(米)一力
- 6 捕(米國)一捕
- 7 斛(米國)一斛
- 8 之(米國)一々
- 9 之(米國)一々
- 10 益(米國)一蓋
- 11 文一多

依漢神崇殺生而祭又修放生善以現得善惡報緣第五

攝津國東生郡撫回村、有一富家長公、姓名未詳也、聖武太上天皇之世、彼家長、依漢神崇、而禱之祀、限于七年、每年殺祀之以一牛、合殺七頭、七年祭畢、忽得重病、又逕七年間、医薬方療、猶不愈、喚集卜者、而破祈禱、亦弥增病、於茲思之、我得重病、由殺生業故、自臥病年、已來、每月不闕、六節受齋戒、修放生業、見他殺含生之類、不論而贖、又遣八方、訪買生物而放、迄七年頃、臨命終時、語妻子曰、我

- 1 舍(國)一貢
- 2 動(米國)一ナシ
- 3 頃(米)一ナシ

死之後、十九日置之、莫燒、妻子置之、猶待期日、唯歷九日、還蘇而語、有七人非人、牛頭人身、我髮繫縛、捉之衛往、見之前路、有樓閣宮、問是何宮、非人惡眼眦、而逼之言、急往、入于宮門、而白召之、吾自知之閻羅王也、王問言、斯是殺汝之讎、答曰當是、則膽机与少刀持出白、急判許、加殺我賊、膽而敵之、時千万余人、勃然出来、解縛繩、曰、非此人咎、所崇鬼神、為祀殺害、爰余居中、而七非人、与千万余人、每日訴靜、如水火、閻羅王判斷之、不定是非、々人猶強白言、明知、是人作主、截我四足、祀廟乞祈、賊膽食者、今如切穴、猶欲屠啗、千万余人、亦白王曰、我等委曲、知非此人咎、識鬼神咎、王自思惟、理就多證、經八日、已、其夕告詔、參向明日、奉詔而罷、九日集会、閻羅王、即告之言、大分理判、由多数證、故就多数、判許已訖、七生聞之、管舌飲唾、切膽為効、嗽安為効、慷慨捧刀、而建各言、不報怨哉、我誓不忘、猶後報之、千万余人、衛繞於我、左右前後、自王宮出、乘輦而荷、擎幡而導、讚嘆以送、長跪禮拜、彼衆人皆、作一色答、爰吾問曰、仁者誰人、答、我等是汝買放生、不忘彼恩、故今報耳、自閻羅闕還甦、增發誓願、從此已後、効不祀神、歸信三宝、已家立幢、成寺安仏、修法放生、從此已後、号曰那天堂矣、終無病、春秋九十余歲而死也、如鼻奈耶經說、迦留陀夷、昔作天祀主、由殺一羊、今雖作羅漢、而後得怨報、於婆羅門之妻所殺云々、如最勝王經說、流水長者、放十千魚、々生天上、以卅千珠、現報流水者、其斯謂之矣、

4 閻(國)一門

5 白(國)一自

6 折(來)一利

7 膽(來)一膽

8 共(來)一ナマス一呪

9 人(來)一ナシ

10 宋一完

11 刀一力

12 曾(來)一当

13 猶(來)一独

14 雙(來)一拳

15 答(來)一若

16 奈耶(來)一李耶

17 卅(來)一卅

18 者(來)一最者

至誠心奉寫法華經有驗示異事緣第六

聖武天皇御代、山背國相樂郡、有發願人、姓名未詳也、為報四恩、奉寫法華經、為納大乘、遣使四方、求白檀紫檀、乃得諾樂京、以錢百貫而買、喚工巧人、規令造函、以奉納經、々長函短、納經不得、檀越大悔、又訪無由、故發誓願、依經作法、屈請衆僧、限三七日、悔過哭曰、亦令得木、歷三七日、請經試納、函自少延、垂不得納、檀越增加、精進悔過、歷三七日、納乃得納、於是奇異疑思、若經短矣、若延函矣、即請本經、与新經以均量之、猶倖不失、誠知、示於大乘不思議力、試于願主至深信心、更不可疑也、

1 詳(來)一桂

2 檀(來)一檀

3 木(來)一木

4 延函(來)延函一函若延函

智者辨妬妄化聖人而現至閻羅闕受地獄苦緣第七

釈智光者、河内國人、其安宿郡鋤田寺之沙門也、俗姓鋤田連、後改姓上村主也、母氏飛鳥部遺也、天年聰明、智慧第一、製孟蘭盆大般若心般若等經疏、為諸學生、統弘佛教、時有沙弥行基、俗姓越史也、越後國頸城郡人也、母和泉國大鳥郡人、蜂田藥師子也、捨俗離欲、弘法化迷、器宇聰敏、自然生知、內密菩薩儀、外現声聞形、聖武天皇、感於威德、故重信之、時人欽貴、美称菩薩、以天平十六年甲申冬十一月、任大僧正、於是智光法師、發嫉妬心、而誹之曰、吾是智人、行基是沙弥、何故天皇、不謝吾智、唯譽沙弥、

1 連(來)一連

2 聰(來)一聰

3 統(來)一統

4 子(來)一ナシ

5 妬(來)一妬之

6 誹(來)一非